

児童が英語に慣れ親しむ「小学校英会話活動」の研究

～文字教具の活用の工夫を通して～

大牟田市教育研究所
大牟田市立明治小学校
教諭 千井 あゆみ

1 主題の意味

(1)「児童が英語に慣れ親しむ」とは

「児童が英語に慣れ親しむ」とは、子どもたちが簡単な英語を聞いたり話したりし、英語に触れ、慣れ親しむことで、物怖じせずにすすんで英会話を行うことである。また、英語を使って自分の思いを伝え合えたことの満足感や楽しさを味わうことで、英語を使ってさらに多くの人とコミュニケーションをしようとする意欲を持つことである。

(2)「文字教具の活用の工夫」とは

「文字教具の活用」とは、英語の文字を記した教具を「見る」ものとして活用していくことである。「聞く・話す」という音声を中心とする1時間の学習活動の中に、英語文字を取り入れていき、子どもたちに出来るだけ英語文字を目に触れさせる機会を多くする。さらに、子どもたちが英語でコミュニケーションをする際の補助として、活動内容に応じて文字教具の提示の仕方を工夫することである。

2 主題設定の理由

(1)本市の取組から

大牟田市内では、特色ある教育の展開のひとつとして平成12年度より、「総合的な学習の時間」を活用して英会話活動に取り組んでいる。その中で、年間活動計画や実践事例の見直しが行われ、平成15年度には『実践事例集』が作成されている。それをうけ、「聞く・話す」という音声を中心とした英会話活動を行っている。このような取り組みに加え、音声を中心とした学習活動に文字教具を取り入れ、文字を会話の手がかりとすることで、子どもたちが英語でコミュニケーションすることに、より慣れ親しめるようにすることが必要となると考えられる。

(2)子どもの実態から

子どもたちは、これまでの英会話活動の学

習から、簡単な英語表現を、聞いたり話したりすることに慣れ親しむようになっている。また、身の回りで英語文字を見ることも多く、英語文字に対しても、関心が高い。これらのことから、「聞く・話す」の活動に、視覚的に文字を提示することで、英会話を意欲的に行うことにつながると思われる。

3 研究の目標

「英会話活動」において、子どもたちが英語に慣れ親しみ、英語でコミュニケーションをする楽しさを味わうために、文字教具の活用の仕方を工夫し、文字教具の有効性について究明する。

4 研究の見通し

小学校英会話活動において、子どもたちが英語に慣れ親しむことができるようになるためには、以下の手だてが重要となるであろう。

ア活動内容に沿った文字教具の提示方法の工夫

イ児童の様子や事後の実態調査からの分析・考察と文字教具やそれらを使った指導内容の修正

ウ英語文字を含んだ掲示物を充実させた教室の環境整備

5 研究の内容

- (1)英会話活動の理論研究
- (2)英会話活動の授業実践
- (3)児童の英語に関する実態調査
- (4)英会話活動に関する環境整備

6 研究の実際

(1)授業実践

【実践例1】4年生 主題「どうしたの？」

(What's the matter?)

本実践では同じ主題を、文字を扱わない

展開と文字教具を使った展開の2通りで行い、子どもたちの活動の様子、子どもたちがすすんで英語を話す様子を比較検討していった。

ア 活用した教具

(ア) 英単語発音

1時目...絵のみ

2時目...絵と英単語

(イ) スキット

1時目...教具なし

2時目...絵と「What's the matter?」「I have a~.」

(ウ) ゲーム

1時目...絵のみ

2時目...絵と「I have a~.」と英単語

イ 検証の結果と考察

(ア) 英単語発音

1時目では、絵を提示しながら教師が発音すると、その後に英単語を繰り返して話すことはできた。しかし、自分たちだけで発音するとき、子どもたちは絵を見て声に出そうとするが、何と言えればいいか思い出すことができず、戸惑う子どももいた。

そこで、2時目に単語を表す絵に文字を加えたカードを用いた。自分たちだけで発音するとき、「headache」などの単語の長さに、最初は難しさを感じる子どももいたが、文字の頭「he」から言い方を思い出して、単語を発音する子どももいて、次第に慣れていくことができた。

(イ) スキット

1時目では、会話をするときの手助けとなるものが何もなかったため、教師の発音を真似して繰り返すことはできても、会話の練習になると、教師の質問に何と答えたらいいのか分からなかったり、質問の文を自分から言えなかったりして、会話が止まってしまう場面が多かった。

そこで、2時目には、英語文字のフレーズを提示した。その文字を教師が指し示すと、上手く応答ができ、会話が成立するようにな

った。1対1の練習では、話す前に、黒板に提示された英語文を見て、答える子どもも多かった。

(ウ) ゲーム

ゲーム活動では、相手を見つけて「What's the matter?」と質問する側と「I have ~.」と答える側になり、体調を表す単語をたくさん使って、会話をするゲームを行った。1時目では、子どもたちに体調を表す絵のみが書かれたカードを持たせた。絵を見ることで、何を言えればいいかは分かっているのだけれども単語が言えなかったり、質問の文を話せなかったりと活動にあまり活気がなく、消極的になってしまった。スキットの練習で、質問の文や答えを言うことに慣れることができなかったことも理由と考えられる。

そこで、2時目には、1時目に活用した絵カードに「I have a~.」の文と英単語を付け加えた。英単語発音やスキットで慣れていたせいか、カードの文字を見て話し、友達と活発に会話をするようになった。また、カードの中に、「I have a~.」と記入しておく、今までの単語のみ(「headache.」など)の返答が「I have a headache.」と、3語を続けて話すようになった。

(エ) 考察

これらのことから、英会話活動において、英語の文字教具を取り入れることで、英語を話す活動を活発にすることに有効であることが分かった。文字を読むということはしていなくても、子どもたちの中で、英語を話す時に、書かれてある文字を見ることが手がかりとなり、すすんで会話ができたと思われる。特にスキットの練習で文字を取り入れると、短い会話に慣れさせることに有効であった。また、事後アンケートの中には、「文字があって分かりやすかった。」「文字があると話しやすかった。」など、子どもたちが活動の中で、文字を意識していることが分かった。

【実践例2】6年生 主題

「学校案内をしよう」(Where is the ~?)

本実践では、1時間の学習活動の中に、様々な文字教具を活動内容毎に取り入れ、子どもたちが楽しく英語でコミュニケーションをするためには、どのような文字教具が有効か、また、文字教具が必要な場面はどこかを検証していった。

ア 活用した教具

(ア) 挨拶

挨拶・出欠・曜日・日付・天気の質問フレーズと答え方のフレーズ

(イ) 英単語発音

3種類のカード

(絵のみ・絵と文字・文字のみ)

(ウ) スキット

場面の絵3枚

各場面のスキットのフレーズ

(エ) ゲーム

校舎案内図

(特別教室の場所に英語文字を記入)

矢印と英語文字の方向カード

尋ねる人・案内する人のカード

(フレーズと場面の絵)

(オ) 歌

英語の歌詞

イ 検証の結果と考察

(ア) 挨拶

始まりのあいさつでは、毎時同じように出欠・曜日・日付・天気を聞いていたので、子どもたちは文字を見てはいるものの、今までに聞いた音声からスムーズに答えていた。また、答えるときに教師が「It's～」を指示すると、今までは単語のみによる返答であったが、文で返答することができるようになった。

(イ) 英単語発音

絵のみのカードで発音練習1回、絵と文字カードで練習1回、文字のみで練習1回を続けて行った。子どもたちが発音する際、どのカードが有効かということ、また、6年生なので、文字だけでも発音できるのではないかと考え、3つのカードを使って練習をした。

前時に練習したこともあってか、3つのカードでさほどの違いはなく、どのカードでもスムーズに発音できた。しかし、文字だけのカードでは、cooking roomとcomputer roomのように同じ頭の文字や同じくらいの長さの文字(cooking roomとscience room)となると間違って発音することもあった。事後アンケートからも分かるように、子どもたちにとっては、絵が文字のヒントもしくは文字が絵のヒントとなるようで、発音する際には絵と文字を組み合わせたカードが有効だと分かった。

(ウ) スキット

場面の絵や案内する方向を示すカードで子どもたちは提示されてある英語の意味を確認できたようだ。また、文字教具を指し示しながら、教師が発音することで、子どもたちは文字と教師の音声を手がかりとしながらスキットを繰り返していた。しかし、チャンツでは、教師の後に繰り返すだけだったせいか、文字は見ず、動作をつけて発音することを楽しんでいた。1対1でのスキットの練習でも、初めはちらっと文字を見ていたが、慣れていくと、文字を見ることはあまりなく、教師や周りの子どもたちが言う音声をヒントとして話していた。反面、事後アンケートでは、スキット練習の時の文字提示について、ほとんどの子どもが、分かりやすい・覚えられる・ヒントになるという理由で、英語文字があった方がいいという結果だった。また、日本語や場面の絵があるかないかの意見は分かれたが、英語文字のみがいいという意見が少数なことからも、高学年でも、文字だけでは負担であることが分かった。

(エ) ゲーム

子どもたちが何と話していいか分からなくなってきたときのヒントとして、尋ねる側・案内する側の両方に場面の絵とフレーズを書いたカード、矢印と英語文字を書いた方向カードを渡した。ゲームが始まると、カードの文字にさっと目をやり、話している子どもが多かった。また、分からないときにも、文字からヒントを探ろうとし、「何と読むのか？」

と質問する子どももいた。文字を意識し、文字を見て話ながら、ゲームを楽しんでいた。しかし、文字を意識するばかりに、何と読むのか分からないで立ち止まったり、会話をするときも相手を見ずに文字を読みながら話したりする様子がうかがえた。ゲーム活動そのものを楽しむことはできても、「文字を読む」ということに囚われすぎていたようだ。

(オ) 歌

本時前までの英会話活動や課外でも歌っていた歌だったので、子どもたちは慣れており、楽しく歌っていた。活動の時に、英語歌詞を提示したところ、子どもたちはそれを見ながら歌っているようにも見えた。しかし、後方の子どもたちにとって、歌詞は見えなかった。それでも、歌っていたということは、それまで積み重ねにより、音声を獲得し、覚えていたことにより、歌えたのだと思われる。

(カ) 考察

活動の中で、教師側が意識的に文字を見て指し示していくと、子どもたちは文字に目を向け発音をするようになった。子どもたちには強制はしないが、教師が文字に意識を持ちながら指導することで、子どもたちも文字を見るようになり、英会話をするときの手がかりにし、活動を意欲的にできることが分かった。子どもたちには、話す際の手がかりとして英語文字が有効であるようだ。また、高学年となると、文字への興味関心が高くなることや文字を文字として意識し、活動していることが分かった。しかし、文字を読むことに集中してしまうと、分からないことに苦手意識を持つようになり、コミュニケーションの楽しさを味わうことから離れてしまったりすることがあると分かった。英会話活動は、あくまでも音声中心であることを前提とし、英語文字は小学校における英会話活動を積極的にさせるための支援と捉えることが大切である。特に、ゲーム活動など会話を行う場面では、英語で伝え合えるコミュニケーションの楽しさを感じることができるよう、文字教具の提示の仕方を工夫していく必要がある。また、1時間の活動では、会話を

楽しむまで達しないような内容においては、数時間をかける計画を立て、文字教具をどの場面で扱うかを検討することが課題の一つと考えられる。

(2) 環境整備

ア 国際理解室の環境整備

(ア) 文字を含んだ英語に関する教具の掲示

(イ) 学習に活用する教具の整理

(ウ) 短い英語文字が書いてある絵本や

教具を作れるような本の収集と設置

イ 教室の英語の関する環境整備

(ア) 日付・曜日・挨拶の英語文字表記

(イ) 学習したときに活用した教具の掲示

(ウ) 健康観察で使う言葉の掲示

(エ) 朝の挨拶(日付・曜日・天気・出欠確認)や健康観察などの英会話の活用

7 研究のまとめ

(1) 成果

ア文字教具を取り入れ、文字を会話の手がかりとすることで、活発に活動を行い、すすんで英語を話すことができた。

イ文字教具を提示したことで、文字に対しての興味・関心が高まった。

ウ英語を目にできる環境整備をすることにより、子どもたちが日常的に英語を見たり、触れたりする機会を増やすことができた。

(2) 課題

ア学年の系統性や発達段階を考慮した文字教具の選定

イ活動内容や場面に応じた文字教具の活用法とその有効性をさらに明らかにする検証方法